

「森のひろば」には木々を活かした手作りの遊具。子どもたちが網を渡り、木に登っていた。広大な園庭は大きく分けて5つの自然体験ゾーンがある。①棚田、②冒険の丘、③小川ピオトープ、④スキひろば(草はらピオトープ)、⑤森のひろば(雑木林エリア)。様々な自然とかかわりながら、主体的な遊びを通して、あるいは課題活動を通して学びを得て、最終的には生きる力につなげていくのが狙いだ



グラウンドはそれほどおもしろくないんですよね(笑)。というのは斜面や凹凸の教育効果を感じてこそのことです。2014年度から現在の場所に移転したのですが、前の園では築山で園庭に変化をつけ、新園では里山の傾斜を活かした園庭としました。

新園の敷地は2・2ヘクタール(約6,700坪)で、様々な「自然スペース」によって構成されています。また、園庭「森のひろば」からつながる40ヘクタールの広大

### 自信はある 確信はなかつた 築山効果を「見える化」

それでも子どもの反応や目の輝き

きで園庭での自然体験に効果があることは実感していましたが、裏付けがありました。そこで園長を務めながら大学院に通い、園庭での自然体験について研究を始めました。私自身、本当にこれでよいのか半信半疑だったのです。

卒園生に園の環境で記憶に残るものを見ると「築山」だったので、これをテーマとして、特に何が印象に残っているのか知るために、小学校

# これからの 園田 がたち

~園長の思いが結実する場所~

## —— 第7回 —— 園庭を里山化する

**学校法人東京内野学園  
東京ゆりかご幼稚園  
(東京都八王子市)**

お話をうかがった人●  
理事長・園長 内野彰裕先生  
写真・文 渡辺 悟



東京ゆりかご幼稚園

所在地: 東京都八王子市七国 3-50-2  
HPアドレス: <http://www.tokyo-yurikago.ed.jp>  
定員: 年少80人、年中80人、年長80人



異例ともいえるこの広い園庭は、内野園長自身の「原体験」があつてのこと。先代園長・副園長だった両親が、幼少の頃から自然の豊かさにふれさせてくれていたのだ。  
入園案内には『『原体験』は、単に『自然が好きになる。自然の大切さを理解する』といった一側面だけではなく、全人格的な発達をもたらしてくれます』とある

私自身が小さい頃に経験した「原体験」が、子どもたちに伝えるべきこととして、ずっと眠っていたんだと思います。やはり鮮明に記憶に残っているのです。土とたわむれたこと、植物を育てた体験が……。

ただ、保育室での時間が必要なことを忘れてはいけないと思っています。幼稚園としては小学校との連携もありますし、バランスを大事にしています。園庭での動的活動と、保育室での静的活動を織り交ぜながらやっています。

全人格的な発達をもつて生きる力としたい。そのための手段として当園は豊かな自然環境を求めました。「生き物好きになるよね」「植物大事にするよね」だけでなく、もつといろいろな効果が得られるのだと訴えています。

そのユネスコスクールの認定を申請しています。

結論として3つの変化が大事だという考えにたどりつきました。「変化のある地形」、四季折々や日々の「自然の変化」、土を掘ったり草を抜いたりなど「幼児のかかわりによる変化」です。これらが相乗効果を生んで「身体能力」「思考力」「好奇心」など16種の教育効果が期待できることを実証しました。

研究は数値化つまり「見える化」でした。保護者や職員への説明でも、実践でも、自信をもつてできるようになります。これが前園の成果です。新園の園庭設計のベースとして、新

1・2年生になった卒園生(2010・2011年度卒)に絵を描いてもらいました。絵のなかの生物の有無や、使っている色などを分析したほか、遊び環境の視点では建築家・仙田満氏の「6つの原空間」、自然体験の視点では兵庫教育大学の山田卓三氏の「原体験」という考え方を援用して検証しました。

園にも築山を作りましたが、今度の環境はスケールがとても大きくなつたので、子どもの遊びもそれにあわせて発展しています。遊びの場は築山から里山の斜面や森へ、活動量は圧倒的に増えました。

## ここまでやるのか! なにも省かない米作り

今取り組んでいるのは「園庭里山化」です。開発のために木を切った土地にうちの園はありますから、そこを親子、先生、みんなで元の里山に戻していく作業です。すでに植樹は800本を超えた。これは汗水流して物事を成す「労作教育」です。園庭里山化で教育効果を得ようと実証しました。

研究は数値化つまり「見える化」でした。保護者や職員への説明でも、実践でも、自信をもつてできるようになります。これが前園の成果です。新園の園庭設計のベースとして、新

んだら使って、浮いたら使えない。この種もみ選定から子どもたちはかかります。

種から苗をつくり、田起こし、畔塗り、代かき、田植え、雑草取りなどなど、やることはたくさんあります。ですが、子どもたちが一から十までやるのが大事なことで、省きません。

稻を刈れば江戸時代の千歯扱きや唐箕<sup>とうみ</sup>も使った昔ながらの脱穀・精米、たき火に飯ごうや釜で炊いて「おにぎりパティー」、徹底してやります。

職員は準備が大変ですが、こういうことが好きな職員が集まっています。ネイチャーゲームの研修や指導者の資格を取ったり、山を散策して環境を調べなどの研修も行っています。

こうした体験を通じて、環境をはじめ、身近な事象に対する理解を深めていく教育プログラムがあります。ユネスコが開発した「持続可能な開発のための教育」(ESD)です。

## 園を知るための 3つの ポイント

園長の理念が現れた、施設や保育内容を3つ取り出して紹介します。



これも手づくりのビオトープ

父親たちの協力で小川をつくり、父子は一緒に汗を流してつくりあげることの楽しさや大切さを知った。移転前の園では2011年と13年にビオトープコンクールで日本生態系協会賞を受賞



園庭とつながる平屋の木造園舎

東日本大震災の経験もあってすぐに外に出られる平屋とした。広い縁側のような廊下は、農家の庭先をイメージ。ソーラーパネル、雨水タンクなども備えて環境にも配慮した。すべて子どもの教育にも活かす



毎日でも遠足  
できる裏山ならぬ表山

東京都の「七国・相原特別緑地保全地区」。深く緑の葉が茂るが、冬には向こう側が透けるように葉が落ちる。生態系も豊かな広葉樹の林だ。ただ、里山林は人の手が入らなければ荒れてしまう。そこにも取り組みたいという